

平成30年度 教育事業

第33回 山から君へのメッセージ

～この挑戦は、一生の宝物～

- 1 趣 旨 冬の高隈山縦走を通して、自然の厳しさや偉大さを体感するとともに、最後までやり遂げる忍耐力や協力心を培い、青少年の自立を支援する。
- 2 期 日 平成30年12月25日（火）～28日（金）
- 3 参加対象 小学校5年生～高校生（不登校など心に悩みをもつ児童・生徒を含む。）
- 4 募集定員 24人
- 5 参加者 23人（小学生10人 中学生7人 高校生6人）
- 6 指導者 南竹 成己 氏（鹿児島県山岳・スポーツライミング連盟）
今村 エミ 氏（鹿児島県山岳・スポーツライミング連盟）
国立大隅青少年自然の家職員
ボランティア10人
- 7 日 程 （宿泊場所）

	12月25日（火）	12月26日（水）	12月27日（木）	12月28日（金）
活動内容	9:00 受付 9:30 出合いのつどい 10:00 登山学習 11:30 講義 パッキング 12:00 レストラン昼食 13:00 マイバス移動 14:00 26番 15:00 25番着 15:30 テント設営 16:30 野外炊飯 19:00 ミーティング・班会 20:00 就寝	4:20 起床・朝食 テント撤収 6:50 25番出発 9:20 御岳登山途中で、 雨のためコース変 更 10:00 25番着 林道 13:00 21番着 15:30 野外炊飯 17:30 ミーティング 18:30 就寝	6:00 起床・朝食 テント撤収 8:00 21番出発 9:00 横岳 9:30 平岳 10:40 二子岳 12:30 妻岳 13:30 御岳 15:35 25番着 バス移動 16:20 キャンプ場着 17:00 野外炊飯 18:45 交流会 22:00 就寝	6:00 起床・清掃等 6:30 野外炊飯 8:00 キャンプ場発 9:00 到着式 10:30 入浴 11:10 感想発表 アンケート記入 11:30 別れ 11:50 解散

8 事業運営について

- (1) 参加者が踏破をしたという達成感や成就感を味わうことと安全に活動できることを配慮して、コースの設定を行った。また、1日目にテント設営やパッキングの練習をする時間を確保することで、2日目の山中泊での参加者の動きがスムーズに行えるようにした。
- (2) 参加者が安全に活動できるように、1日目に登山や体調管理の学習を計画した。山登りや山中泊の様子、景色などの写真を見ながら話を聞くことで、これから始まる活動のおおまかなイメージをもたせるとともに、安全面を参加者自身が意識するようにした。
- (3) 活動は班を基本にして行い、自分の役割を果たすことや目標に向かって協力することができるようにした。また、班付きボランティアを意図的に配置して、個に応じた支援が手厚くできるようにした。

9 事業の実際

- (1) 1日目は、登山や健康・体調管理に関する話と短い距離の慣らし登山、及び山中泊（25番ポイント）を計画した。25番ポイントでは、テント設営や片付けを班で協力しながら練習することで、登山に対する心構えや見通しをもつことができた。
- (2) 2日目は、雨が降る中でテントを片付け、御岳を目指して出発したが、参加者の歩くペースが予定より遅いこと、天候の回復が望めないこと、宿泊地の妻岳分岐点の状況が予想できないことの3点から、

コースを変更した。登ってきた道を25番ポイントまで引き返し、林道を通って21番ポイントをめざした。一日中雨が降り続き、体が冷えたり疲れが出たりした参加者もいたが、お互いに励ましたり荷物を分担したりしながら協力して活動する姿が随所に見られた。

- (3) 3日目は、コースを変更して、21番ポイントから横岳・平岳・二子岳・妻岳・御岳と縦走を行った。途中には急斜面やロープなどで登る岩場もあったが、グループ内で自然に手を貸したり声を掛け合ったりしながら乗り越えて、全員無事に25番ポイントへ到着することができた。夜はキャンプファイヤーを行い、スタッフやボランティアを含めた全員で交流を深め、楽しい思い出の一時にすることができた。最後には、感想発表があり、全員が自分の言葉で感じたことをしっかり発表することができた。お互いの感じたことを共有する時間をもったことで、自分の姿をさらに深く振り返ったり、友だちや家族の存在、自然などへ思いを巡らせたりすることができていた。

- (4) 4日目は、キャンプ場から本館までを歩き、全員ゴールをすることができた。最後まで自分の脚で到着したことによってやり遂げた喜びがあふれていた。参加者の感想の中には、踏破できた理由として、仲間やスタッフの助けや励ましがあつたことが多くあげられていた。また、自分の頑張りを認めたり気持ちの変化を感じたりする自己肯定感の向上も見られた。

- (5) 登山の活動及びテント設営や野外炊飯は、協力して行うことができた。回数を重ねるごとに手際がよくなっていった。雨天のため、予定していたグループミーティングができないこともあったが、ボランティアが参加者に寄り添いながら様子を把握して、個に応じた支援や言葉かけを行い参加者の意欲や自信を引き出すことができた。

10 成 果

- 真冬の高隈連山縦走は、参加者にとってかなり困難な内容であるため、鹿児島山岳・スポーツライミング連盟の講師に、ルート設定や救助ルート等を相談したり、一緒に実踏を行ったりして、危険箇所や所要時間等を確認しながら計画を立てた。そのため、達成感が味わえ、安全性の高いルート設定やプログラムとなった。
- 2・3日目は天候不良により計画を変更したが、縦列隊と本部の連携を密にして、状況に応じた判断や計画の変更を行うことができた。本部の臨機応変な協力体制のおかげで、その時の状況下において参加者が最大に達成感を味わえるルートを設定して歩くことができた。
- 雨に濡れて歩いたため体調不良を心配したが、着替えや体温調節の仕方などを具体的に伝えたり、睡眠時間を十分に確保したりすることで、最終日まで全員で歩くことができた。
- 班で活動することを基本としていたため、お互いの体力や年齢、性格等を考慮しながら、声をかけ合ったり助け合ったりする場面が多く見られた。異年齢で班を編制し活動することの有効性が感じられた。
- 日頃悩みを抱えている子供については、事前の状況をスタッフやボランティアが共通理解し、実際の姿や情報を共有しながら接していったことで、その子供たちが意欲的に活動し満足した表情でプログラムを終えることができた。

